

## 藝術学関連学会連合第13回公開シンポジウム

### 会場校よりのご挨拶と趣旨説明

小菅隼人

慶應義塾大学教養研究センター所長・日本演劇学会副会長

本日は、藝術学・関連学会連合・第13回公開シンポジウムにお集まりいただき有難うございます。私は、本シンポジウムを共催しております慶應義塾大学教養研究センターの所長で、今回のシンポジウムの幹事学会である日本演劇学会の副会長を務めております小菅隼人と申します。一言ご挨拶と本日の趣旨を説明させていただきます。

この慶應義塾大学日吉キャンパスは、関東大震災で大きな被害を受けた慶應義塾に対して東急電鉄が7万2千坪の土地を無償提供したことにより、東急東横線日吉駅とほぼ同時の1934年(昭和9年)に慶應義塾がこの地に大学予科を設置したのが始まりです。縄文遺跡も多く出土している古い土地ですが、第二次世界大戦中は海軍軍令部、連合艦隊司令本部などが置かれ、戦艦大和の出撃命令もここからなされたとされています。その為、敷地内には広大な地下壕が建設されて現在も残っています。キャンパスは敷地面積10万坪ほどありますが、貴重な自然が温存され、今日、みなさまが歩いてきた、日吉駅から工事中の日吉記念館に至る幅22m、長さ220mの中央道路脇には100本の銀杏並木があり、「横浜市まちなみ景観賞」を受賞しています。このキャンパスには、慶應義塾大学の10学部のうち7学部が教養課程を置き、その他に慶應義塾高校、慶應普通部、三つの大学院、七つの研究所が設置されています。この建物は、福沢諭吉の漢詩に由来して、「来往舎」と呼ばれますが、2001年に竣工し、教養研究センターが置かれています。

さて、今年度の公開シンポジウムは、「藝術と教養」とさせていただきます。「イギリス批評の父」と呼ばれるジョン・ドライデンは、1667年にイギリスにおける本格的な演劇論の嚆矢となる『劇詩論』(Of Dramatick Poesie)を著し、古代作家と現代作家、英仏演劇の比較、エリザベス朝演劇と王政復古期演劇の比較、演劇における規則の是非、劇の文体の優劣など、その当時の演劇界の重要トピックスを、四人の人物の対話形式で論じました。議論が白熱する中で、四人のうち一人、リジディアスが、“劇がどのようなものであるべきかを知らなければ、誰が最高の劇を書いたかを論じるのは不可能だろう”と発言します。リジディアスがそう言うや否や、他の三人は、“それでは劇の定義を教えてください”と彼に懇願します。そこでリジディアスは、劇とは「人間性の正確で生き生きとしたイメージであり、人間のパッションとヒューモア、人間の従属する運命の変転を描いて、人間を楽しませながら教え導くもの」と述べます。

ドライデンに限らず、演劇の目的が“教えかつ楽しませるもの”(for the delight and instruction of mankind)とする言説は、古今東西に繰り返されてきた演劇理論の一つであることは言うまでもありません。そして、おそらくそれは、藝術全般に当て嵌まることでありましょう。その根底にあるのは、藝術は、広い意味で楽しいもの、心地よいものでありつつ、豊かな人間性を涵養するために役に立つもの、言い換えれば、藝術は人間が人間であるために必須のものという確信であります。そして、藝術は、まさにこの意味において、人々にとってなくてはならないものであります。事実、デイヴィッド・シャルクウィックは、2014年、ウォリック大学で行われた、国際演劇学会IFTRでの基調講演において、かつて、全財産を奪われ監禁された南アフリカの政治犯が、音楽、美術、演劇、文学などの教養(Humanities)が、人間にとって不可欠なものであ

り、「食べ物よりも重要だったことを確信した」とする発言を紹介しました。

しかし、一方、藝術の本質に創造性（creativity）があり、創造性が革新性のことだとすれば、教養と芸術は対立概念かもしれないという疑いも生じてきます。なぜなら、教養の最大の特徴は、古典作品という形で生き残る過去と現在の我々を繋ぎ、また文化を異にする人々をつなぐ、共通基盤のことであり、そうであれば、そこで求められるのは、革新性ではなく、共有性であるとも言えるからであります。創造性を核とした藝術という概念と教養という概念がどのように繋がるのかという問題に対して私自身は有効な解答を得られていませんが、今後、考究すべき問題として、（今も会場に見えられている）横山千晶教授と共に勉強会を立ち上げたところでもあります。

2018年度の藝関連公開シンポジウムでは、藝術は教養となりうるのか？藝術が教養の一部になるとすれば、教養としての藝術とはどのようなものを言うのか？そもそも、藝術的教養は人間にとって必要なのか？という問題をめぐり藝術の存在意義を「教養」という文脈において考えたいと思います。さらに、古典古代より、「教養」は「教育」と結びつき、その対象と役割が様々に論じられてきたことを思えば、藝術と「教養」の問題は、藝術と「教育」の問題でもあると考えられます。実際、藝術学関連学会に属するかなりの大学教員は、専門教育や職業教育としてではなく、教養教育として演劇を教えています。その際、私たちは、何を、何のために、どの様にして教え、研究と結びつけたらいいのでしょうか？今大会では、以上のような問題意識から、意匠学会、日本演劇学会、美学会、美術史学会をから四人の代表者による発表ののち、日本デザイン学会の富田先生、広島芸術学会の青木先生の司会によって活発な討論がなされることと思います。

私は、最初に申しましたように、この建物におかれております慶應義塾大学教養研究センターの所長を仰せつかっております。これが教養「研究」センターであるという点に私は独自性があると思っていますが、これまで、実にしばしば、「教養研究センター」が「教養教育センター」と誤って呼ばれたり、「教養センター」と短縮して呼ばれる場面に遭遇しました。そこではいずれも「教養」や「教育」という言葉に重点が置かれ、「研究」という言葉は忘れられているか省かれています。これはたいへん残念なことと私は感じています。それは、先ほども触れましたように、「教養」が人間にとって必要なものでありながら、いまだその形式も機能も目的も性格も明確に答えられる人はいないからです。例えば、マシュー・アーノルドは1882年に著した『教養と無秩序』（Culture and Anarchy）において「教養」を「文化」（Culture）と捉えました。また、T. S. エリオットは、1944年の「古典とは何か」（“What is a Classic?”）というエッセイの中で、「教養」を「成熟」（Maturity）という言葉で表しました。さらに福澤諭吉のいう「学問」の勧めは、まずは学ぶ姿勢の奨励という意味で「教養」の勧めであると私は捉えています。いずれも、「教養」を直観的に規定したのですが、教養研究センターの最大の目的は、「教養とは何か？」「教養はどのような役割を果たすのか？」「教養は何のために必要か？」という疑問に明確な答えを与えられるだけの研究を行うことだと私は思っています。今回の慶應義塾大学日吉キャンパスで開催される藝関連公開シンポジウムにおいて、藝術という面から教養を考える、あるいは、教養という面から藝術を考える機会を与えていただき大変感謝しております。

くり返しになりますが、私は、教養は、医療と同じく、それが個人にとってなくてはならないものであると同時に、社会全体にとってもなくてはならないものだと思っています。日本における平成29年度の警察庁発表の自殺者は年間2万1千321人です。交通事故死亡者が3千694人であることを考えれば、豊かな精神の涵養は、すでに生死の問題とも言えるのです。藝術はその

主役になるべきものであることは言うまでもないことでしょう。

あらかじめ幹事の委員からのお許しは得ておりますが、本日の公開シンポジウムは、共催である慶應義塾大学教養研究センターの研究活動の一環でもありますので、記録させていただき、ホームページ上と冊子体で公開させていただきます。但し、各発表者には公開前に今一度ご確認をいただき、加筆訂正の機会を持ちますので、よろしくご協力をお願いいたします。

有難うございました。